

大航海時代を過ぎて(1)「アフリカは長いこと「暗黒大陸」と呼ばれていた。アフリカ探検が本格的になったのは、一八世紀後半からだ。その歴史は、たかだか二〇〇年あまり。アフリカについての本を書いた人といっても、おそらく数百人だろう。だから、じつと見ていると、発見とまではいわないが「え? こんなこと本に書いてないよ」という場面に出くわすことがある。本を書く人たちは、限られたエリアの動物について調査し、書いているわけなので、必ずしもそれを一般化できるとは限らない。たとえばライオンの本。ライオンについて本を書いている人は、数十人。しかもライオン全例を見ているわけではない。ところがそれが活字になって、世界中で出版されると、それを全世界、何億という人々が読んで、それを真実と思ひ込む。しかし、まちがいは多い。特に動物は物語が作りやすい、という性格上、著者の思いが事実を歪曲させやすい。

たとえば、「ゾウの墓場」という話を「存知だろうか。ゾウは自分の寿命を知っていて死期が近づくと、ある場所に自ら行って、そこで息を引き取る。そこには死んだゾウの白骨が*累累とあり、「ゾウの墓場」と呼ばれている、というものだ。ゾウの墓場……。本当にあるのなら、ぼくだって見てみたい。それは、こんな話から作られたのではないだろうか。B 例え、洞窟があつて、たまたまそこにミネラル分の多い岩塩などがある。そこに、たまたまゾウがやってくる。ミネラルの多い岩塩に惹かれて洞窟に入ったけれど、出られなくなってしまった。上るときに怪我をして死んだとか……。後でそれを発見した人が、ゾウの骨が固まってあるから、これはゾウの墓場に違いない、と。そんなことなら想像できる。

結論を先に出してそれに縛られるとか、人間の考えることはどうも*パターン化してしまっているように思える。(2) 原始の人間はそんなことはなかっただろう。自分の目で見て自分で判断し、自分で一つ一つ覚えていかなければならない。命にかかわるようなことであれば、うかつに一般化することはできないはずだ。

ヒトが見たものを、意識の言葉に置き換えて理解しようとする、どうしても限界がある。ヒトの言葉はヒトがわかりやすいように作られたものだ。ヒトが、見たものを言葉に置き換えるのは、むしろ自然なことだと思ふのだが、それはあくまで*「便宜上」のことだということ、つい忘れてしまう。そのために誤解の範囲を広げてしまうということがあるのではないだろうか。ゾウの挨拶みたいに。ゾウが出会ったときに、相手と鼻を絡ませ合う。それをヒトの言う挨拶のようなものと解釈して、(3)「あれはゾウの挨拶行動である」と断言してしまふと、実はゾウにとっては、それは挨拶でもなんでもないかもしれない。ゾウは何メートルも向こうからやってくる別のゾウを識別できるのだから、それを【1】「そばに来て、「あ、〇〇さんだわ、こんにちは」とやるだろうか。自分たちの行動に照らし合わせてわかりたいと思ふのが、ヒトの特徴なんだらう。ライオンは「なぜゾウはあんなに鼻が長いんだろう」なんて【2】「思わないだろう。だからヒトも「なんでなんだろう」と思わずに、「ゾウの鼻は長いんだ、最初から長いんだ」と思えたら、野生動物の見方も、考え方も【3】「変わるってくるのではないだろうか。」

また、「ガラパゴスゾウガメは、成体、卵にかかわらず、流木などにつかまって、何らかの形で大陸から流されてきた」というのが学者の「定説」だ。ガラパゴス諸島は数百万年前に火山が隆起した島々だから、というのがその根拠だが、【4】「ここにいたという考え方があつてもいいのではないだろうか。ふだんの暮らしのなかでも自分の目で見る、ということ、意識的にしていかなければ、と思ふのだ。」

そういう意味では、子どものほうが見方が自由だ。娘が小学校三年生のとき、オーストラリア・カンガルー島のヒツジの牧場に九月ほど住んだ。そのとき、ヒツジが日がな一日草を食んでいるので、ぼくは彼女に「ヒツジさんて、なに考えてるんだろうね」と尋ねた。すると娘は「草だよ。草しか見てないよ」。確かに動物は食べることしか考えていないに違いない。(4) 僕は思わず「深いな」と感心してしまつた。

同様に、ヒトと他の動物を分ける大きな特徴は、①直立二足歩行 ②言葉 ③道具、といわれているが、それにも例外がある。(5) 特に「三番目の「道具」については、現在では異論も多いようだ。東アフリカのチンパンジーが細い枝を使ってシロアリ釣をしたり、ギニアでは、石でアブラヤシの実を割ったりする話、オランダウタンが大きな木の葉を傘代わりにしたり、木の枝で川の水深を測りながら渡ったりする話などは有名だ。ぼくが見たのは、そうした類人猿の話ではない。ゾウなのだ。なかなか信じてもらえないかもしれないが、証拠の映像もある。あるメスのゾウが、木の枝で自分のあごを掻いているところを見たのだ。日中、群れが木陰で休息しているときだった。そのメスは地面から長さ約一・五メートルの枝を選び、その端を鼻で持つて、もう一方の端をあごの下に持つていって、ぎこちなく感じで掻いている。それは非常に自然なやり方で、少し違和感もなかった。偶然かもしれないと思つたが、しばらくやっていると、痒いところがずれていくと、ちよつと位置を変えて、数分間やつていた。おそらく偶然ではないだろう。それをヒトが見れば、「道具を使う」ということになる。そしてさらに「道具の知能」と結論づける。

しかし、ゾウにはゾウたちのルールがあつて、それは人間の言う知能とは少し違うものなのではないかと思ふ。ゾウは家族単位で群れを作っているのだが、その家族ごとに草の食べ方、しいていうなら「伝統」「作法」のようなものがある。草の巻き方、泥の扱い方が群れごとに違うのだ。草の根についた泥を、体につけて払う方法とか、そのまま鼻で振つて落とす方法とか、微妙な違いかもしれないけど、見ていて明らかに違う。もしかすると、たまたまぼくが見ていた世代だけが同じ方法を取っていただけなのかもしれない。(6) それ以外の世代にも伝えられるとすると、それは立派な伝統になるのではないか。そしておもしろいこと、この作法はメスだけなのだ。オスにはない。

人間の常識にとらわれずに観察すると、実にいろいろなことが見えるものだ。ただ、それは、言葉にできるような、文字にできるようなことではない。絶えず野生動物に対しているとある緊張が生まれる。その緊張感から、間や肌合いがわかってくるように思えるのだ。(7) 水が流れるように、自分も自然の状態に合わせて変わっていく。常識にとらわれ、自分をそれにはめて考えようとすると、見えるはずのものが見えなくなってくる。自分の頭の中を、常に柔らかにしていなければならない。同じところへ繰り返し行くようになると、見方が変わってくる。南極に近いサウスジョージア島では、来る日も来る日も、ペンギンを見ていた。ふと気づいたのだが、そのペンギンたちは左右の足の太さが違うのだ。これは大発見だと思つた。イギリスの有名な鳥類学者に、そのことを報告すると、(8) 彼は、そんなことは考えたこともない、どんな本を見ても出ていない、と言ふ。そこで考える。なぜ、太さが違うのだろうか。もしかすると、陽のまわり方によつてからだが変わってくる、ということもあるかもしれない。ともあれ、そつと見てみるによつて発見がある。カメラマンは這いつくばって観察するから視線が低くなる。それで最初に足が目に飛び込んでくるのではないだろうか。そういえば、カンガルーの赤ちゃんが生まれてお母さんの袋の中に入るのを初めて見たのは学者ではなかった。画家だったそうだ。見続けることが一番大切なのだ。ときに視線の高さを変えて……。セレンゲティに住んでいるときのことだ。ある日撮影に出かけた途、中、車が故障してしまった。仕方がないので、家まで三四キロの道のりを歩いて帰った。ちよつと雨季が明けるときで、ヌーの群れがいた。キリンが水を飲んでた。ジャツカルのカップルが、ぼくのまわりをぐるぐるくるくる回っていた。そうやって自然の中を歩いていて、(9) ぼくは「あれ?」と思つた。いつもと何が違う。

受験番号

いつも車の中から動物たちを見ていた。車を降りると、人間はとても小さい。視線の高さが動物たちに近くなつていたのであった。そうやって見ていると、いつもと違って見えてくる。よく「毎日同じ動物を見ていて退屈しないんですか。毎日見ていると同じ動物でしょ」と聞かれるが、同じに見えることはまったくくない。小さな発見がいくつもあつて、飽きることなんてないのだ。(10) そのだいたいな宝物を拾つて行く場合がある。

頭のいい人は、言わば(11)富士のすそ野まで来て、そこから頂上をながめただけで、それで富士の全体をのみ込んで東京へ引き返すという心配がある。富士はやはり登つてみなければわからない。

頭のいい人は見通しがきくだけに、(12) あらゆる道筋の*前途の難関が見渡される。少なくとも自分でそういう気がする。そのために(13) ややもすると、(14) 前進する勇氣を*阻害しやすい。頭の悪い人は前途に霧がかかっているためにかえつて楽観的である。そうして難関に出会つても*存外どうにかしてそれを切り抜けて行く。どうにも抜けられない難関というのはきわめてまれだからである。

それで、*研学の徒はあまり(15) 頭の(16) 先生にうっかり助言を請うてはいけない。きつと前途に*重畳する難関を一つ一つ(17) しらみつぶしに*枚挙されてそうして(18) 自分自身のかく楽しみにしている*企図の絶望を宣告されるからである。*委細かまわず着手してみると存外指摘された難関は楽に始末がついて、指摘されなかった意外な難点に出会うこともある。頭のよい人は、あまりに多く頭の力を過信する恐れがある。その結果として、(19) 自然がわれわれに表示する現象が自分の頭で考えたことと一致しない場合に、「自然のほうが間違っている」かのように考える恐れがある。まさかそれほどでなくても、そういうたような傾向になる恐れがある。これでは(20) 自然科学は自然の科学でなくなる。(21) 一方でまた自分の思つたような結果が出たときに、それが実は思つたとは別の原因のために生じた偶然の結果でありはしないかという可能性を*吟味するといつた方がいい仕事をする恐れがある。

頭の悪い人は、頭のいい人が考えて、はじめからためにきまつているような試みを、一生懸命につづけている。やつと、それがだめとわかるころには、しかししたいい何かしらだめでない他のものの糸口を取り上げている。そうしてそれは、そのはじめからだめな試みをあえてしなかつた人には(22) 決して手に触れる機会のないような糸口である場合も少なくない。

(18) 自然は a *書卓の前で手をつかねて空中に絵を描いている人からは逃げ出して、 b 自然のまん中へ赤裸で飛び込んで来る人へのみその c 神祕の扉を開いて見せるからである。

- * 前途——行く先
- * 存外——案外
- * 重畳する——何重にも重なる
- * 企図——くわだて、計画
- * 吟味する——念入りに調べる
- * 阻害しやすい——失いやすい
- * 研学の徒——学問を研究する人
- * 枚挙されて——いちいち数え上げられて
- * 委細かまわず——細かい事情にとらわれず
- * 書卓の前で手をつかねて——机の前でうで組み

別紙 I の文章について。

問一 線部(1)「アフリカは長いこと「暗黒大陸」と呼ばれていた」とあるが、なぜ「暗黒大陸」と呼ばれていたのか、答えなさい。

問二 A、B についての説明として正しいものを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア Aは、野生動物が、人間には計り知れない本能を持つという事実について語ったものである。
- イ Aは、ゾウの死について人間が思いえがく姿が根底にあつて生まれたものである。
- ウ Bは、人間の想像を全く入れずに、科学的な立場から述べたものである。
- エ Bは、「ゾウの墓場」があるという結論にしばらくはいられていて、獨創性を欠いたものである。
- オ AもBも、ゾウの骨が一所に固まつて存在する理由を、人間が想像したものである。

問三 線部(2)「原始の人間はそんなことはなかっただろう」と筆者が考えるのはなぜか、説明しなさい。

問四 線部(3)「あれはゾウの挨拶行動である」と断言してしまつ」にあらわれている「ヒト」の特徴を二つ挙げなさい。

問五 【1】～【4】に最もふさわしい語を次のア～カから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

- ア ますます
- イ もともと
- ウ おそろしく
- エ いかにも
- オ ずいぶん
- カ わざわざ

問六 線部(4)「僕は思わず「深いな」と感心してしまつた」とあるが、筆者はどういう点に「感心」したのか、最もふさわしい説明を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 娘の答えが、思いのほか大人びたものだった点。
- イ 娘の答えが、子どもらしい素直な想像力を働かせたものだった点。
- ウ 娘の答えが、人間ではなく動物の見方に沿つたものだった点。
- エ 娘の答えが、動物の生態に関する知識に基づくものだった点。

問七 線部(5)「特に三番目の「道具」については、現在では異論も多いようだ」とあるが、なぜか、二〇字以内で答えなさい。

問八 線部(6)「それ」が指している内容を二〇字以内で答えなさい。

問九 線部(7)「水が流れるように」の言いかえとして最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 勢いよく
- イ おのずと
- ウ すっかり
- エ 当然

問十 線部(8)「彼は、そんなことは考えたこともない、どんな本を見ても出ていない、と言つ」とあるが、その原因にあたる部分を文章中から一文でぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

問十一 線部(9)「ほくは「あれつ」と思った」とあるが、それはなぜだったのか、説明しなさい。

別紙 II の文章について。

問十二 線部(10)「そのだいたいな宝物」に当たるものを文章中の [] から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア あらゆる道筋の前途の難関
- イ 前進する勇氣
- ウ 自分のせつかく楽しみに行っている企図
- エ 自然がわれわれに表示する現象
- オ 決して手に触れる機会のないような糸口

問十三 線部(11)「富士のすそ野まで来て、……東京へ引き返す」とはどういうことを言っているのか、科学者に当てはめて説明しなさい。

問十四 線部(12)「やもすると」の意味として正しいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア とかく
- イ いっそ
- ウ およそ
- エ もっと

問十五 線部(13)「まれた」の意味を答えなさい。

問十六 線部(14)「頭の [] 先生」に当てはまる二字の言葉を文章中よりぬき出しなさい。

問十七 線部(15)「しらみつぶしに」をわかりやすく言いかえなさい。

問十八 線部(16)「自然科学は自然の科学でなくなる」とはどういうことか、説明しなさい。

問十九 [] (17)「二方でまた自分の……忘れる恐れがある」の内容と合うものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 頭のいい人は、期待通りの結果が出ない場合、偶然のせいだと考えて、その結果を認めない。
- イ 頭のいい人は、思い通りの結果が一回得られただけでは、それを偶然だと思ひ、満足しない。
- ウ 頭のいい人は、結果が仮説と一致すると、それが他の偶然の結果である可能性を検証しない。
- エ 頭のいい人は、偶然出た結果も自分の科学的知識で説明できると考え、それ以上研究しない。

問二十 [] (18)「自然は……開いて見せるからである」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 線部 a「書卓の前で手をつかねて空中に絵を描いている人・b「自然のまん中へ赤裸で飛び込んで来る人」とは、別紙 I の文章におけるペンギンの例ではだれに当たるか、それぞれ説明しなさい。
- (2) 線部 c「神秘」とは、ペンギンの例では何に当たるか、答えなさい。

問二十一 筆者が文章中で述べている「頭のいい人」「頭の悪い人」について、あなたは自分をどちらだと思いますか。一方を選び、その理由を二〇字以内で具体的に書きなさい。なお、どちらを選んでも、点数には関係ありません。

二一 は裏にあります。

受験番号

二 次に示すのは、童謡『鯉のぼり』の歌詞です。この内容の説明として正しいものを後のア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

豊いらかの波し雲の波
重なる波なみだらの中空を
橋たはな かわる朝風に
高く泳ぐや鯉のぼり

開けるあき其の口に
舟ふねをも吞のまん様見えて
ゆたかに振おう尾お鱈たかには
物に動おぜぬ姿あり

百瀬ももせの滝たきを登りなほ
忽たちまち竜りゆうになりぬべき
わが身に似およや男おのこ子と
空に躍おどるや鯉のぼり

ア 海に見立てた大空を、鯉のぼりはゆうゆうと泳いでいる。
イ 晴れたお正月の空に鯉のぼりの姿が美しく見え、風は橋のかおりをふくんでいる。
ウ 子どもたちは、空高く泳ぐ鯉のぼりを、大きく口を開けて楽しそうに見ている。
エ 風を尾まではらんで泳ぐ鯉のぼりは、舟をも呑みこむほど堂々としている。
オ 滝を登って上からなめると、鯉のぼりは竜のように見える。
カ 鯉のぼりは男の子に向かって、自分のように立派になれ、と言っているようだ。

三 漢字の問題は解答用紙にあります。

次のカタカナを漢字で書きなさい。

(1) オンコウ
な性格の人。

(2) 時代の スイイ
を見守る。

(3) 食料を チョゾウ
する。

(4) 豆やキビなどを ザツコク
という。

(5) 日本に キカ
したお相撲さん。

(6) 朝刊の紙面を サツシン
する。

(7) 事態を シュウシュウ
する。